

社会福祉学部20周年おめでとうございます

著者	奥田 邦晴
引用	社会問題研究. 2001, 51(1・2), p.213-215
URL	http://hdl.handle.net/10466/6899

社会福祉学部20周年おめでとうございます

奥田 邦晴

私は大学院博士前期課程を1998年3月に卒業しました。まだ卒業してからわずか数年しかたっていないにもかかわらず、このような記念誌に執筆させていただく機会を頂戴し恐縮いたしております。

私は理学療法士です。16年間の臨床に携わった後、現在は、将来の理学療法士の卵達に教鞭をとっています。私が以前勤務していた病院はリハビリテーション病院であったため、日々の診療において障害者の方々と関わる機会が多く、障害について自分なりにいろいろ考えたものでした。特に、重度障害者の方に理学療法を行う過程で、自分自身の能力不足や医療の限界を痛感し、理学療法と社会福祉の関係について研究したいとずっと考えていました。臨床家から教育者として仕事の内容が変わった今でも、その思いは強くなるばかりで、一人でも多くの福祉マインドを持った理学療法士を育てたいと考えるようになってきました。

社会福祉学を学ぶのであれば、是非、歴史と学識のある大阪府立大学でという思いがあり、2年間をかけてやっとの思いで博士前期課程に入学することができました。今から思えば、専門分野の問題の難しかったこと。試験対策としてレキシコンを読みあさったことがついこの間の出来事のように思い出されず。学部の人達は、問題を見たときに、今回の試験作成者はあの先生だなど予想でき、自動的に要求されている答えも浮かぶのですが、そのような知識を全く持ち合わせていなかった自分にとっては、問題を見たときに胃が痛くなった思い出が今でも鮮明に残っています。仕事の合間をぬって一生懸命試験勉強をしたわりには、全く自分の読みがはずれて、試験中にぶつぶつ独り言で文句を言っていたことを今でも同級生から冷やかされます。

大学院に入学がかない、一番嬉しかったことは、多くの著名な先生方の御講義を間近で受けることができたことです。大ホールの片隅で先生方の御講演を

拝聴するのが精一杯であった自分にとって、それは思いがけないことでした。それもお茶やお菓子を食べながら、お話を伺え、その上議論がかなうのですから。

とはいえ、英訳を中心とした宿題は、仕事をしながらの自分にとっては、なかなかつらいものでありました。また、社会福祉の基礎を全く持ち合わせていない私にとって、大学院で学ぶには余りにいろんな事、特に専門に関することについての知識が乏しく、先生方や同級生に多大なご迷惑をおかけしたことと思います。にも関わらず、素人の私に対して厳しくはあったけれども暖かく、同じ目線でご指導、議論いただき感謝いたしております。今になって、より一層、先生方の偉大さが分かり、もっとまじめに勉強したら良かったと反省しております。非常勤の先生方にもお世話になりました。特に一園先生のようなご高名な先生からイギリスの福祉施策について先生の体験談をお伺いできたことや英文の訳し方を一字一句丁寧にご教授いただけことが印象的でした。大学院ならではのことで大変感謝いたしております。

修士論文では、テーマを身体障害者のスポーツの社会福祉的意義に関する研究とし、黒田先生にご指導いただきました。お願いに伺ったときの先生のお言葉は今でも強烈に覚えています。あなたは理学療法士ですが、社会福祉を学びにこられたのですから、論文の作成の過程で、絶対に理学療法士の色を出さないように。この言葉には正直参りました。理学療法の経験から論文をまとめてみようと思っていた自分の心を一瞬に見透かされて、喝！という感じでした。

この先生の言葉に奮起し、自分の社会福祉に対する取り組み方が大きく変わったと思っています。社会福祉学を素直に勉強する傍ら、医療モデルが悪の代名詞であるかのように述べている、また、リハビリテーションを悪玉のようにいう社会福祉学への挑戦の幕開けでもありました。こんな生意気な中年学生に、手厳しい議論をぶつけていただいたおかげで、医療・福祉に関する考え方やこれからの自分の研究の方向性がはっきりしたように思います。

2年間という短い期間ではありましたが、自分の無知を痛感しながらも、大

学院で社会福祉について勉強させていただいたことは、私にとって大変有益なことでありました。社会福祉学を通し、自分が属している医療分野についての認識を新たにすることができたとともに、理学療法学や障害者の方々との関わりについて再考することができました。

医療人は得てして、専門の知識は持ち合わせているものの、社会福祉学的視点に立脚した考え方は希薄になりがちです。すなわち疾患だけをその対象に考え、全てを個人の問題に帰結してしまう傾向があり、全人的にとらえることを怠りがちです。これに関しては逆も然り。仕事柄、社会福祉学を学んでいる学生さんにリハビリテーションに関する講義をする機会があるのですが、車椅子の扱い方すら知らなかったり、障害者や老人について、医学的な観点から全く見ることができない、あるいは関心が薄く見ようともしない学生を多くみうけます。机上で福祉政策等についてのディベートを展開することももちろん非常に重要なことですが、せめて駅や街角で障害者を介助する機会などに遭遇した場合、社会福祉学部の学生は率先してリーダーシップをとれないと…。

障害を理解するとはよくいわれることですが、理解するためには障害についていろいろな角度から多面的に見ていくことが重要であり、社会福祉学を学んだものであっても、医学を学んだものであっても、また、理学療法学を学んでいる私にとっても、その目的は生活支援につきるのではないでしょうか。

最後になりましたが、大阪府立大学社会福祉学部の益々のご発展を祈願するとともに、今後より一層の他領域との学際的交流を図っていただくことを期待いたします。

(1997年度博士前期課程修了・大阪府立看護大学短期大学部助教授)